

8
176

吉田春盛編輯

刑法

刑法附則

合卷一冊

治罪法

治罪法參考諸布令

明治十七年一月改正出版

0710

特14
154

吉田春盛編輯

刑法

刑法附則

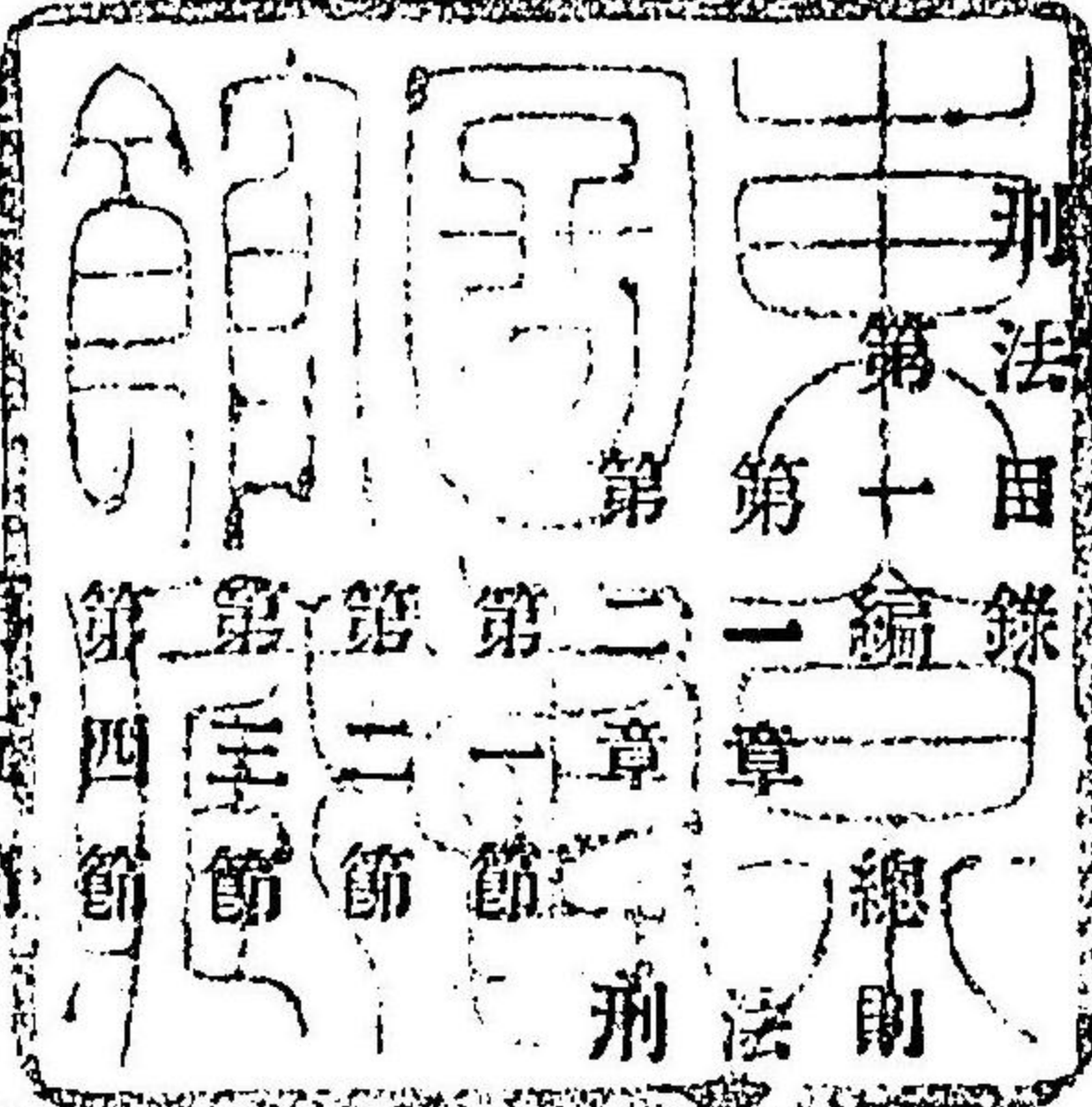
治罪法

治罪法參考諸布令

合卷一冊

明治十七年一月改正出版

刑 法	第 三 章	第 一 節	第 四 章	第 三 章	第 八 節	第 七 節	第 六 節	第 五 節	第 四 節	第 三 節	第 二 節	第 一 節	第 一 章	第 十 編	刑 法 目 錄
○ 目 錄	酌 量 減 輕	自 首 減 輕	不 論 罪 及 宥 恕 減 輕	不 論 罪 及 減 輕	加 減 例	復 權	期 滿 免 除	假 出 獄	刑 期 計 算	徵 償 處 分	附 加 刑 處 分	主 刑 處 分	刑 名	刑 例	刑 例



C2
711
0132

刑
法
目
錄

第
一
編
總
則

第
一
章
刑
名

第
二
章
主
刑
處
分

第
三
章
附
加
刑
處
分

第
四
章
徵
償
處
分

第
五
章
刑
期
計
算

第
六
章
假
出
獄

第
七
章
期
滿
免
除

第
八
章
復
權

第
九
章
加
減
例

第
十
編
刑
例

第五章 再犯加重
 第六章 加減順序
 第七章 數罪俱發
 第八章 數人共犯
 第一節 正犯
 第二節 從犯
 第九章 未遂犯罪
 第十章 親屬例
 第二編 公益ニ關スル重罪輕罪
 第一章 皇室ニ對スル罪
 第二章 國事ニ關スル罪
 第一節 内乱ニ關スル罪
 第二節 外患ニ關スル罪
 第三章 靜謐ヲ害スル罪
 第一節 兇徒聚集ノ罪
 第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪
 第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ匿スル罪

第四章 附加刑ノ執行ヲ遁ルノ罪
 第五節 私ニ軍用ノ銃礮彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪
 第六節 往來通信ヲ妨害スル罪
 第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪
 第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪
 第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪
 第四章 信用ヲ害スル罪
 第一節 貨幣ヲ偽造スル罪
 第二節 官印ヲ偽造スル罪
 第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪
 第四節 私印私書ヲ偽造スル罪
 第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪
 第六節 偽證ノ罪
 第七節 度量衡ヲ偽造スル罪
 第八節 身分ヲ詐稱スル罪
 第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪
 第五章 健康ヲ害スル罪
 ○目錄

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪

第六節 風俗ヲ害スル罪

第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第九章 官吏濫職ノ罪

第一節 官吏公益ヲ害スル罪

第二節 官吏人民ニ對スル罪

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二節 毆打創傷ノ罪

五

刑法

○目錄

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第二節 強盜ノ罪

第一節 竊盜ノ罪

第二章 財産ニ對スル罪

第十三節 祖父母父母ニ對スル罪

第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪

第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪

第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第八節 墮胎ノ罪

第七節 脅迫ノ罪

第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第五節 自殺ニ關スル罪

第四節 過失殺傷ノ罪

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不諭罪

第六節 贓物ニ關スル罪
 第七節 放火失火ノ罪
 第八節 決水ノ罪
 第九節 船舶ヲ覆没スル罪
 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

刑法附則目錄

第一章 主刑執行
 第二章 監視
 第三章 假出獄及ヒ特別監視
 第四章 刑事裁判費用
 第五章 賠償處分

刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

一 重罪

二 輕罪

三 違警罪

第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルヲ得ス

第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未ダ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルヲ得ス

第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

一 主刑ハ之ヲ宣告ス

第一編

○法例

○刑例

二

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四無期流刑

五有期徒刑

六重懲役

七輕懲役

八重禁獄

九輕禁獄

第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一重禁錮

二輕禁錮

三罰金

第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一拘留

二科料

第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一剝奪公權

二停止公權

三禁治產

四監視

五罰金

六沒收

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヲ得ス

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ

刑ヲ行ハス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分タス嶋地ニ發遣シ定役ニ服ス

第一編 ○刑例

四

有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分ク島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス

有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限り居住セシムルヲ得

有期徒刑ノ囚三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從テ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス

重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

錮禁ハ重輕ヲ分ク十一月以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條 定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニアラス

第二十六條 罰金ハ二圓以上十圓以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算

シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過シルコトヲ得ス

若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メタル時亦同シ

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

第三節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一國民ノ特權

二官吏ト爲ルノ權

三勳章年金位記賞號恩給ヲ有スルノ權

四外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權

五 第一編 ○刑例

六 五兵籍ニ入ルノ權

六裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス
七後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス
八分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權
九學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フヲ停止ス

第三十四條 輕重ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ期限間公權ヲ行フヲ停止ス

主刑ヲ免シ止テ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治ムルヲ禁ス

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セシレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルヲ得

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ付加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルヲ得

ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ起算ス

若シ主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルヲ得

第四十二條 付加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ

一 法律ニ於テ禁制シタル物件

二 犯罪ノ用ニ供シタル物件

三 犯罪ニ因テ得タル物件

第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルヲ得ス

第四節 徵償處分

七 第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ

第一編 ○刑例

八 定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレ、ト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カルハ、コトヲ得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヨシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セス

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ

一 犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二 檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トチ分タス前判宣告ノ日ヨリ起算ス

三 上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節 假出獄

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ悔改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スコトヲ得

無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サル、ト雖モ仍ホ嶋地ニ居住セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除

第五十八條 刑ノ執行ヲ遙レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一 死刑ハ三十年

二 無期徒刑ハ二十五年

三 有期徒流刑ハ二十年

第一編 ○刑例

九

四重懲役重禁獄ハ十五年

五輕懲役輕禁獄ハ十年

六禁錮罰金ハ七年

七拘留科料ハ一年

第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス

附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラス

第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

第六十二條 刑ノ執行ヲ遁レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節 復權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルコトヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因リ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非レハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラス

第三章 加減例

第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四重懲役

五輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期流刑

三有期徒刑

四重禁獄

五輕禁獄

第一編

〇刑例

〇加減例

二 第六十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス

輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルヲ得

第七十一條 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルヲ得

第七十二條 拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス

違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルヲ得減シテ一日以下ニ降スヲ得ス科料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルヲ得減シテ五錢以下ニ降スヲ得ス

第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止タ主刑ヲ科ス

第四章 不論罪及ヒ減輕
第一節 不論罪及ヒ宥恕減輕

第七十五條 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦同シ

第七十六條 本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラス

罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラスシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス
罪本重カル可シテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルヲ得ス

法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシト爲スヲ得ス

第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審察シ辨別ナシシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス

第八十一條 罪ヲ犯ス時滿十六歳以上二十歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

三一 第一編 ○不論罪及ヒ減輕

四一

第八十二條 瘡痍者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因テ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十三條 違警罪ハ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヲ得ス
滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歲ニ滿サル者及ヒ瘡痍者ハ其罪ヲ論セス

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス
第二節 自首減輕

第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ス
第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ
第三節 酌量減輕

第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ得
法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルヲ得

第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章 再犯加重

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年内再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルヲ得ス

第九十五條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徴收ス

第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ非常律ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章 加減順序

五一

第九十八條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑

第一編 ○再犯加重 ○加減順序

名ヲ定ム但從犯及ヒ去遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

一再犯加重

二宥恕減輕

三百首減輕

四酌量減輕

第七章 數罪俱發

第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未ダ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ隨テ處斷ス
重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス

輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニテ處斷ス

第一百一條 違警罪ニ罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從フ

第一百二條 一罪前ニ發シ己ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ヲ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ己ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未ダ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス

第一百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時雖モ其沒收及ヒ徵償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第一百四條 二人以上共ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス

第一百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第一百六條 正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ホスヲ得ス

第一百七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆者ヲ算入シテ多數ト爲スヲ得ス

第一百八條 事ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人教唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法教唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ教唆者ヲ處斷ス

一所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止タ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス
二所犯教唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ行フ所ノ罪ニ於テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第一百九條 重罪輕罪ヲ犯スヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止タ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

第一百十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス
正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルヲ得ス

第一編 ○數罪俱發 ○數人共犯

第九章 未遂犯罪

第百十一條 罪ヲ犯サントシテ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第百十二條 罪ヲ犯サントシテ己ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ己ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第百十三條 重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス
輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章 親屬例

第百十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

- 一 祖父母父母夫妻
- 二 子孫及ヒ其配偶者
- 三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者
- 四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者
- 五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者
- 六 父母ノ兄弟姉妹ノ子

七 配偶者ノ祖父母父母

八 配偶者ノ兄弟及姉妹及ヒ其配偶者

九 配偶者ノ兄弟姉妹ノ子

十 配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ
養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條 天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第百十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

九一 第百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下

第一編 ○未遂犯罪 ○親屬例 第二編 ○皇室ニ對スル罪

〇二

ノ罰金ヲ附加ス

第二百十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内乱ニ關スル罪

第二百一十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊乱スルヲ目的ト爲シ内乱ヲ起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁及ヒ教唆者ハ死刑ニ處ス

二 群集ノ指揮ヲ爲シ其他極要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期流刑ニ處シ其情輕者ハ有期流刑ニ處ス

三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁獄ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁獄ニ處ス

四 教唆ニ乘シテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十二條 内乱ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ己ニ

内乱ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第二百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ舉ルニ至ラスト雖モ内乱ト

同ク論シ其教唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第二百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第二百二十五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内乱ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第二百一十一條

ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

内乱ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第二百二十六條 内乱ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者

ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百二十七條 内乱ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十八條 内乱ニ乘シテ人ノ身體財産ニ對シ内乱ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ

通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ

敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十條 交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ

兵器彈藥船舶其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷

ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

第二百三十二條 陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又ハ

其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第二編 〇國事ニ關スル罪

第二百二十三條 外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル時ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第二百二十四條 外國交戦ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第二百三十六條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ説諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル者首魁及ヒ教唆者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル時ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十七條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ニ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ時ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス

首魁及教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第二百二十九條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ

第二百四十條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百五十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書畫又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第二百四十二條 己決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十三條 己決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

第二百四十四條 未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第二百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シ處斷ス

第二百四十五條 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第二百四十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二編 ○靜謐ヲ害スル罪

四二

第四百四十六條 囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シムル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス囚徒ノ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第四百四十七條 囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第四百四十八條 囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ前條ノ例ニ同シ

第四百四十九條 前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百五十條 看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百五十一條 犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルコトヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第四百五十二條 他人ノ罪ヲ免カレシメコトヲ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱藏シタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百五十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節 附加刑ノ執行ヲ通ルハ罪

第四百五十四條 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百五十五條 監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百五十六條 前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第四百五十七條 官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得スシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百五十八條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止タ正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第四百五十九條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百六十條 第四百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金

第二編

○靜謐ヲ害スル罪

五二

ニ處ス

第六十一條 第五百十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供ス可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第六十二條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十三條 偽計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第六十五條 瀛軍ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐僞ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第六十七條 前數條ニ記載シタル罪其專務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第六十八條 第六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ

從テ處斷ス

第六十九條 第六十五條第六十六條ノ罪ヲ犯シ因テ瀛車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆沒シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ迷ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪

第七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一 門戸牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キ入りタル時

二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ攜帶シテ入りタル時

三 暴行ヲ爲シテ入りタル時

四 二人以上ニテ入りタル時

第七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ

第二編 ○靜謐ヲ害スル罪

加フ

第八節 官ノ封印ヲ破棄スルノ罪

第七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二
月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取ル又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ
照シ重キニ從テ處斷ス

第七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヲ覺ラサ
ル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

第七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ
肯セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀壞シテ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ
以テ免役ヲ圖リタル時ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應シ
タル者ハ第二百三十一條ノ例ニ照シテ處斷ス

第七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシ
テ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十條 裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサ
ル時ハ亦前條ニ同シ

第八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ検査シ又ハ
消滅ノ方法ヲ陳述スルヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ
罰金ニ處ス

獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第八十二條 内國通用ノ金銀及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第八十三條 内國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第八十四條 官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ内外國ノ
區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十五條 内國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以上ノ重禁錮ニ處ス

九二 第二編 ○靜謐ヲ害スル罪 ○信用ヲ害スル罪

○三 第八十六條 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各三等ヲ減ス

第八十七條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第八十八條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第八十九條 偽造變造ノ貨幣ヲ内國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第九十條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第九十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ管スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第九十二條 貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第九十三條 貨幣ヲ取受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變造ナルヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額ニ倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スヲ得ス

第二節 官印ヲ偽造スル罪

第九十四條 御璽國璽ヲ偽造シ又ハ其偽璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第九十五條 各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第九十六條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九十七條 御璽國璽官印記號印章ノ影蹟ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ

第九十八條 官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九十九條 己ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

一三

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷

第二編 ○信用ヲ害スル罪

六

第二百一一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條 詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書地券其他官吏ノ公證シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ

輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ

各一等ヲ加フ

其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルニ因テ官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照

シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監

視ニ付ス

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條 他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五

十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ盜用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若シハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ偽造シ

又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其手形證書ニ詐僞ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ

第二百十條 賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル

者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以

上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處

斷ス

第二百十二條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十三條 官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四

圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ

テ處斷ス

四三

第二百十四條 屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐偽ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十六條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐偽ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ

第六節 偽證ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ偽證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ

罰金ヲ附加ス

三違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヲ得但減シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スヲ得ス

第二百二十二條 偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

第二編 ○信用ヲ害スル罪

五三

若シ被告人ヲ死ニ陥ル、目的ヲ以テ偽證ヲナシタル時ハ死刑ニ反坐ス其未ダ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事ハ行政裁判ニ關シテ偽證ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前數條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ法方ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

第二百二十七條 度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シテ各一等ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ内外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第二百三十三條 公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 證書ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐偽ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二編 ○信用ヲ害スル罪

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條 阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス
第二百三十八條 阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條 税關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條 阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス
人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條 阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以上以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條 阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條 傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條 船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スコトヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條 傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他所ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條 獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他所ニ出シタル者ハ十一日土二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十條 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪
官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條 官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二編 ○健康ヲ害スル罪

〇四

第二百五十二條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條 規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節 私ニ營業ヲ爲ス罪

第二百五十六條 官許ヲ得スシテ營業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十七條 前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六章 風俗ヲ害スル罪

第二百五十八條 公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十九條 風俗ヲ害スル冊子圖書其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百六十條 賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮

ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ非ラス

賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス

第二百六十二條 財物ヲ濺集シ富強ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十三條 神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ説教又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百六十四條 埋葬ス可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十五條 墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

一四

因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二編

〇風俗ヲ害スル罪

〇死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

四 第二百六十六條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條 偽計又ハ威力ヲ以テ穀類其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラサル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害スル者ハ一等ヲ減ス

第二百六十八條 偽計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十九條 偽計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十條 農工ノ雇人其雇賃ヲ増サシメ又ハ農工ノ景況ヲ變セシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十一條 雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十二條 虛偽ノ風説ヲ流布シテ穀類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九章 官吏瀆職ノ罪

第一節 官吏公益ヲ害スル罪

第二百七十三條 官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セス又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十四條 兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎮撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條 官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二節 官吏人民ニ對スル罪

第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十七條 人ノ身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢事警察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セスシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

三 第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ

第二編 ○商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪 ○官吏瀆職ノ罪

四四

時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十二條 裁判官檢察事及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ凌虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十三條 裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理セス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ

第二百八十四條 官吏人ノ囑託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十五條 裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ裁判ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條 裁判官檢察事警察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其被告人ヲ陷害シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所ノ刑此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百廿二條ノ例ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條 裁判官檢察事警察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾サミ被告人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂己ニ收受シタル者ハ之ヲ沒収シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第二百八十九條 官吏自ラ監守スル所ノ金穀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス

因テ官ノ文書簿冊ヲ増減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外ノ金穀ヲ徵收シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ附ス

第二編 ○官吏瀆職ノ罪

第三編 身體ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ己ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀故殺ヲ以テ論ス

第二節 毆打創傷ノ罪

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷テ陰陽ヲ毀敗シ若クハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癱疾ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日に至ラサル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癱篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ己ニ犯シテ其罪ヲ免カ、ル爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但致

唆者ハ減等ノ限ニ在ラス

第三百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ幫助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例

第三編 ○身體ニ對スル罪

七四

ニ照シテ處斷ス

第三百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詭稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆

打創傷ヲ以テ論ス

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

第三百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥

恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十條 毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルヲ能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルヲ

得

第三百十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ

宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十二條 書問故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ

防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條 前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第三百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ己ムヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲

メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不當ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此

限ニ在ラス

第三百十五條 左ノ諸件ニ於テ己ムヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス

一 財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二 盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時

三 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル

時

第三百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ己ムヲ得サルニ非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又

ハ危害己ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情

狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルヲ得

第四節 過失殺傷ノ罪

第三百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セズ過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二

百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癱瘓疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ

處ス

第五節 自殺ニ關スル罪

第三百二十條 人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月

以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者

ハ一等ヲ減ス

第三編 ○身體ニ對スル罪

第二百二十一條 自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節 擅ニ人ヲ逮捕スル罪

第二百二十二條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百二十三條 擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十五條 擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節 脅迫ノ罪

第二百二十六條 人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

毆打創傷其他暴行ヲ加ヘント迫脅シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫掠セント迫脅シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十七條 兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第二百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ

第二百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第八節 墮胎ノ罪

第三百三十條 懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百三十三條 懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條 懷胎ノ婦女ナルコトヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百三十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癡篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第三百三十六條 八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス
自ラ生活スルコト能ハサル老疾者ヲ遺棄シタル者ハ亦同シ

一五 第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寮閤無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加

第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ癱疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルヲ知テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル者亦同シ

第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪

第三百四十一條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ略取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十二條 十二歳以上二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十三條 略取誘拐シタル幼者ナルヲ知テ自己ノ家屬僕婢ト爲シ又ハ其他ノ名稱ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第三百四十四條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但略取誘拐セラレタル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ効ナシ

第三百四十五條 二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪

第三百四十六條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歳以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十七條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十八條 十二歳以上ノ婦女ヲ強姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス
藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ強姦ヲ以テ論ス

第三百四十九條 十二歳ニ滿サル幼女ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ強姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百五十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但強姦ニ因テ癱篤疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三編 ○身體ニ對スル罪

四五

第三百五十二條 十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ効ナシ

第三百五十四條 配偶者アル者重テ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百五十六條 誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第三百五十七條 誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス

第三百五十八條 惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハズ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十九條 死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

第三百六十條 醫師藥商穩婆又ハ代言人辨護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス

第三百六十一條 此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第十三節 祖父母父母ニ對スル罪

第三百六十二條 子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ

第三百六十三條 子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但癡疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十四條 子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三編 ○身體ニ對スル罪

五五

因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百六十五條 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

第二章 財産ニ對スル罪

第一節 竊盜ノ罪

第三百六十六條 人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條 水火震災其他ノ變ニ乘リ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十八條 門扉牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

前條ニ同シ

第三百六十九條 二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條 兇器ヲ携帯シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條 自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條 田野ニ於テ穀類菜葉其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

處ス

第三百七十三條 山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百七十四條 牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十五條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百七十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス

若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節 強盜ノ罪

第三百七十八條 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

第三百七十九條 強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ

一 二人以上共ニ犯シタル時

第三百八十條 強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處ス死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

二 兇器ヲ携帯シテ犯シタル時

第三百八十一條 強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ論ス

第三編

○財産ニ對スル罪

第三編

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

○財産ニ對スル罪

第三百八十三條 藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物理藏物ニ關スル罪

第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ二百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條 家資分散ノ際其財產ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ増加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

情ヲ知テ虛偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條 家資分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪トシ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百九十一條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十二條 物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十三條 他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

自己ノ不動産ト雖モ己ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重テテ抵當典物ト爲シタル者亦同シ

第三百九十四條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百九十五條 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條 自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ハタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ二月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第六節 贓物ニ關スル罪

第三百九十九條 強竊盜ノ贓物ナルヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百一條 詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第一節 放火失火ノ罪

第四百二條 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條 火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第四百四條 火ヲ放テ廢屋及ヒ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百五條 火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶瀛車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

其人ヲ乘載セサル船舶瀛車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

第四百六條 火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者

ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條 火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條 放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條 火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條 火藥其他激發ス可キ物品又ハ煤氣井蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財産ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分チ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節 決水ノ罪

第四百十一條 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百十三條 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條 過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第四百十五條 衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但船中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

二六

第四百十六條 前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十九條 人ノ稼穡竹木其他用需ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十條 土地ノ經界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十二條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四編 違警罪

第四百二十五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

一規則ヲ遵守セシメテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者

二規則ヲ遵守セシメテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者

三官許ヲ得シテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者

四人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者

五蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

六官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サ、ル者

七官許ヲ得シテ死屍ヲ解剖シタル者

八自己ノ所有地内ニ死屍アルコトヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者

九人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

十一人ノ住居セサル家屋内ニ潛伏シタル者

三六

第三編

○財産ニ對スル罪

第四編

○違警罪

- 十二 定リタル住居ナク平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者
- 十三 官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者
- 十四 違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者但被告人偽證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ第二百十九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓五

十錢以下ノ科料ニ處ス

- 一 人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者
- 二 水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦ス可キノ求メテ受テ傍觀シテ之ヲ肯セサル者
- 三 不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者
- 四 健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者
- 五 人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サハル者
- 六 路上ニ於テ犬其他獸類ヲ喉シ又ハ驚逸セシメタル者
- 七 發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者
- 八 狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放テタル者
- 九 變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者
- 十 墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者
- 十一 神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚瀆シタル者

十二 公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但訴テ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十七條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二

十五錢以下ノ科料ニ處ス

- 一 濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 二 制止ヲ肯セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者
- 三 夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者
- 四 木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケス又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者
- 五 瓦礫ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者
- 六 禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者
- 七 汚穢物ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者
- 八 警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者
- 九 醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者
- 十 死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者
- 十一 流言浮説ヲ爲シテ人ヲ誑惑シタル者
- 十二 妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者
- 十三 私有地外ニ濫リニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒楹ヲ出シタル者
- 十四 官許ヲ得スシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者

第四編 ○違警罪

- 十五路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ厠場等ヲ毀損シタル者
- 十六道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者
- 第四百二十八條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス
 - 一官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者
 - 二渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取り又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
 - 三渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ通行シタル者
 - 四路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者
 - 五官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者
 - 六溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
 - 七制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者
 - 八官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者
 - 九身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
 - 十他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者
 - 十一他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者
- 第四百二十九條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス
 - 一橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者
 - 二牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横タヘ又ハ木石薪炭等堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

- 三車馬ヲ並ヘ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 四水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
- 五氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者
- 六官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サハル者
- 七制止ヲ肯セスシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 八牛馬ヲ牽キ又ハ繫クコトヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 九出入ヲ禁止シタル場所ニ濫ニ出入シタル者
- 十通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
- 十一道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者
- 十二酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ醉臥シタル者
- 十三路上ノ常燈ヲ消シタル者
- 十四人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
- 十五邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
- 十六他人ノ田野園圃ニ於テ菜菓ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
- 十七公園ノ規則ヲ犯シタル者
- 十八通路ナキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者
- 第四百三十條 前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰

則ニ從テ處斷ス
刑法附則

第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ典獄刑場ニ立會典獄ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行ス可キコトヲ告示シタル後押丁ヲシテ之ヲ執行セシム但其期限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サス但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシメ果シテ懐胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ執行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ典獄之ヲ許可シ下付スルコトヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ典獄ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルコトヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ族籍氏名年齢職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

刑法附則

犯罪ノ地
犯人住居ノ地

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ監獄管理長官ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船ノ地ニ護送ス可シ

第十條 徒刑ノ囚ハ嶋地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヲ得

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ内務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ク可シ
第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許ス可シ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ典獄ノ監督ヲ受ケシム若シ己ムコトヲ得サル事故アル時ハ典獄ニ請フテ限外ニ出レコトヲ得

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヲ得

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第十九條 囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送ス可シ (明治十五年八月第四十二號布告ヲ以テ改正)

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條 明治十五年八月第四十二號布告ヲ以テ削除

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ延滞シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ
第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期限間遵守ス可キ條件ヲ讀聞カセ監視ノ票ヲ刑法附則

下付ス可シ

- 第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ
 - 一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ己ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ
 - 二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス
 - 三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ
 - 四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許サス若シ己ムコトヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申シ許可ヲ受ク可シ
- 第二十八條 監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ
- 第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ通知シ
- 第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滯留スル時日ヲ算シ往復日數ヲ限定ノ旅券ヲ付與ス可シ
- 犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納ス可シ
- 第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時延滞シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添へ警察所ニ差出ス可シ

刑法附則

- 第三十二條 監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間監獄中ノ別房ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ
 - 第三十三條 監獄中ノ別房ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ
 - 第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付ス可キ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付ス可キ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ
 - 第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ
 - 第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ謹守シ悛改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得
 - 第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ
- 第三章 假出獄及ヒ特別監視
- 第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレノコトヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ
 - 第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ犯人ニ下付ス可シ
 - 第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

四七

- 一 本人ノ属籍氏名年齢住所罪名刑名及ヒ懲刑ノ年月日
- 二 殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事
- 三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事
- 四 假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事

第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ第二十二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ(明治十五年八月第四十二號布告ヲ以テ改正)

第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

- 一 毎週間一度所轄ノ警察所ニ至リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ己ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ
- 二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス
- 三 事故アリテ住所ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルコトヲ許サス

四 往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルコトヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ヲ及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ監獄中ノ別房ニ留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辨人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ム可シ(明治十六年十一月第三十九號布告ヲ以テ改正)

日當五十錢以下

旅費一里十錢以下

止宿料一宿二十五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滞在中日當並ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス

刑法附則

五七

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第百九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルヲアル可シ

第五十二條 解剖含密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵収ス

第五章 賠償處分

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

第五十五條 贓物輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルヲ得ス

若シ公商ニ由ラスニテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉價ヲ求ムルヲ得

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉價ヲ求ムルヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トチ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス

可シ

第五十八條 贓物己ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルヲ得若シ其審判己ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從テ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルヲ得

第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルヲ得

治罪法目錄

第一編	總則
第一章	刑事裁判所ノ構成及ヒ權限
第二章	通則
第三章	違警罪裁判所
第四章	輕罪裁判所
第五章	控訴裁判所
第六章	重罪裁判所
第六章	大審院
第七章	高等法院
第三編	犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審
第一章	搜查
第一節	告訴及ヒ告發
第二節	現行犯罪
第二章	起訴
第一節	檢察官ノ起訴
第二節	民事原告人ノ起訴
治罪法	○目錄

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

第三節 證據

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五節 檢證及ヒ物件差押

第六節 證人訊問

第七節 鑑定

第八節 現行犯ノ豫審

第九節 保釋

第十節 豫審終結

第四章 豫審上訴

第四編 公判

第一章 通則

第二章 違警罪公判

第三章 輕罪公判

第四章 重罪公判

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第二章 再審ノ訴

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第二章 復權

第三章 特赦

治罪法追告目錄

○太政官第四十四號 (明治十四年九月二十日御布告)

○同 第四十五號 (同年九月二十日御布告)

○同 第四十六號 (同年九月二十日御布告)

○同 第四十七號 (同年九月二十日御布告)

○同 第四十八號 (同年九月二十日御布告)

○同 第五十三號 (同年十月六日御布告)

○同 第五十四號 (同年十月六日御布告)

治罪法 ○目錄

四

- 同 第五十五號 (同年十月六日御布告)
- 同 第五十六號 (同年十月七日御布告)
- 同 第五十七號 (同年十月七日御布告)
- 同 第五十九號 (同年十月八日御布告)
- 同 第八十六號 (同年十月四日御達)

治罪法

第一編 総則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ヲシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サ、ル場合ハ此限リニ在ラス

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲スヘカラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其効ナカ
ル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判

第一編 ○總則

二

所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス
刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下テ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲ス
ヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ
妨礙ト爲ルヲナカルヘシ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニテ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理スヘキ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因テ其刑ノ廢止

五大赦

六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ

公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起
算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若
クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當
人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限
ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ並算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ
經過ヲ中斷スルノ効ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ
在ラズ

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事

第一編 ○總則

原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヲ得
被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ
其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル
損害ノ償ヲ要ムルヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴
ヲ爲スヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シ
タル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初
日ヲ算入セズ若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在
ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ歴ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里
以上ナル時亦同シ

嶋地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外

其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可
シ否ヲサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達
書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑
託ス可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヲ得サル時ハ其住所ニ於
テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其
旨ヲ附記シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヲ肯セサル時ハ其地ノ
戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ

送達人一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

五 第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其送

六

達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ効ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ヲ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ効ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其効アリトス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ捜査ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名公廷ニ立會フ可シ

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條 書記ハ豫審及公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一編 ○總則 ○第二編 ○通則

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト強モ上等裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若クハ法律上逮捕スルコト許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

闕席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ら其管轄ナリヤ否ヤ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴ス

ルヲ得

第二章 違警罪裁判所

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢察官ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間

之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢察官又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス

ルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ隨ヒ司法警察官

トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲

メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルコアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ主件表ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ差出ス

ヘシ

第二編

○ 違警罪裁判所

○ 輕罪裁判所

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ治安ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムル事ヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコトアル可シ

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

シ事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第二編 ○控訴裁判所 ○重罪裁判所

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察長又ハ其指名シタル檢察之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢察長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可

キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老議官大審院判事中心ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名之ニ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢察長又ハ司法卿ヨリ指命シタル檢察之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スル事ヲ得

一 闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第二編 ○大審院 ○高等法院

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アル事ヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第四百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢察官告訴ヲ受ケタル時ハ第七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢察官ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第一百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢察官ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢察官又ハ司法警察官ニ告發スルヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人ノヲ爲スモ其効アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ヲ受クルヲアル可シ

第二節 現行犯罪

第七一 第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ
第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

第三編 ○捜査

一犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時

二兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ其戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第二百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ令狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第二百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ
其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第二百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第二百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第二百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スコトヲ得
被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告發又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非レハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二百七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第二百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

九一
第二百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ
第二節 民事原告人ノ起訴
第三編 ○搜查 ○起訴

第一百十條

重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キニ申立テ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一百一條

被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

第一百十二條

被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヲ得

第三章 豫審

第一百十三條

現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ効ナカル可シ

第一百十四條

豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告訴ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送

致ス可シ

第一百十五條

豫審判事ハ告訴發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ拘引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後拘留狀ヲ發スルヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サ、ル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨碍ト爲ルヲナカル可シ

第一百十六條

被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヲ得

第一百十七條

檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第一節 令狀

第一百十八條

豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第三編

○起訴

○豫審

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ過クルコトヲ得ス
第一百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明
示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第一百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得
第一百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得
一 被告人定リタル住所アラサル時

二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アル時

第一百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留
狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第一百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在
ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引
狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第一百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊
問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キコトヲ請
求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ拘引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ
其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル拘引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡
ヲ爲ス可シ

第一百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ
應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人其管轄
地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノコトヲ囑託ス可シ

第一百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第一百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後
禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第一百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第
二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルコトナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キコトヲ豫審判事ニ求ムルヲ得
第一百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サ
レハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第一百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概略
二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルコト

四二

第三百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第三百三十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第三百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルコアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其贖本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キコトヲ請求スルコトヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ己ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第三百三十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルコト能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取証書ヲ渡ス可シ

第三百三十九條 拘留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ贖本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルコトヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢事ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

五二

六二

第四百一十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ拘留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百一十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第四百一十三條 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ拘留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第四百十六條 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急速ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルキハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ

被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四百十九條 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第四百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第四百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則

ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第五百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

第五百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ摸樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第五百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第五百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第五百五十七條 通事ニ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第五百九十二條 第五百九十三條 第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第五百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ摸樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ摸樣ヲモ記載ス可シ

第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ摸樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ摸樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第三百三十三條 第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ら立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ

第三編 ○豫審

通延ス可カラス

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ
物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ
示シ辨解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立
會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第六十七條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入
スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑
託スルコトヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事
由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ
物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ
原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル
者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限り先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲
メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシ之ヲ呼出スコトヲ得

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ
之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事
ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得本條
ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ
呼出狀ノ送達ト出庭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

二三

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲテ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出庭セシム可キヲ認可シ又ハ職務上己ムヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出庭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヲ其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルヲ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ證明ス可シ

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヲ許サズ但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタ

第三編 ○豫審

三三

ル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑
法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
醫師樂商穩婆又ハ代言人辨護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ
付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリト
スル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所
又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得

若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲ササルノ事由ヲ記載ス可シ
第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ヲキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞
カセシム可シ
證人ハ其陳述ヲ變更増減セシムヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ

調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其
旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ借金ヲ要ムルヲ得
本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ニ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトス
ル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑
定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲スヘシ宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ
書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ
刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急遽ノ際
第三編 ○豫審

正當ノ鑒定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑒定ヲ命スルヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑒定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑒定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑒定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑒定セシムルヲ得

第九十八條 鑒定人ハ鑒定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑒定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ
若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑒定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑒定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑒定書ニ記載ス可シ
第九十九條 鑒定人ハ鑒定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑒定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ
鑒定書ハ鑒定命令書ニ添置ス可シ

外國人鑒定ヲ爲シタル時ハ其鑒定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置ス可シ
第二百條 鑒定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アル事ヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ル事ヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發ス其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得
第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受

理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツナク其旨ヲ通知シ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナク之ヲ聽ク可シ
第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ述ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ
第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作りタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ス可シ

第三編 ○豫審

八三 第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得

被告人無能力ナルハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定

メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書

ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケテ正當ノ理由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾

分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ

該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル

金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕

罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保釋證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ

故舊ニ責付スルヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル

時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ

得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結

ス可シ

○四

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告ハ勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ證據充分ナラサル時

二 被告事件罪ト爲ラサル時

三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四 確定裁判ヲ輕タル時

五大赦アリタル時

六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告ハ勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條

被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコトヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ
管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣證據ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ
但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾

二四

留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコト得ス
第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコトヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ニ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

一 管轄ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ合狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時

四 起權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時

ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事二名以上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ノ親屬ナル時

二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ品物ヲ收受シ若シハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其中立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得
會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第三編 ○豫審上訴

四四

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタルキ又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲ス事ヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百二十七條ニ定メタル原由アル事ヲ認メ又ハ回避ス可キ者トシタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコトヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スル事ヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツルコトヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタルキハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其中立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得
被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スコトヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達スヘシ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ノ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

第三編 ○豫審上訴

五四

六四

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付
キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示ス

ル所ノ條件ニ付キ更ニ調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタ

ル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スコトヲ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫

審判ヲ受ケル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫

審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送

達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キ事及ヒ其期限ヲ

記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ヲ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フ事ナカ

ル可シ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ

之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同

一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許可スキヤ否ヲ判決

ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辨論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサル時ハ其旨渡ノ効

第四編 ○通則

七四

ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辨論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辨論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辨論ノ爲メ辨護人ヲ用フルコトヲ得 辨護人ハ裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辨護人ト爲スコトヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辨論ヲ妨碍スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得 若シ辨論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマデ辨論ヲ停止ス

辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辨論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辨論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ巨長ニ送達ス可シ 第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辨護人ヲ用フルコトヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ證明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人ノ中一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ豫審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ 稱讚誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

九四 第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違輕罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ

○五

命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違輕罪裁判所ニテハ違輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辨論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ豫審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所

輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百二十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避 申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル

可シ但五日間辨論ヲ停止シタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ
變異厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効チ有ス

一五 第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲ニ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

豫審ニ於テ録取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又陳述前辨論ニ立會フ可カラヌ

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アルハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得

訴訟關係人ハ辨論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ

求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル者ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審

判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ録取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件

ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金

ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上二十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラヌ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權

ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サレ時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルコトヲ得但延期シタルキハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百八十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第二百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辨護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコトヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辨護人ヲシテ發

言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辨論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直ニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ

之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルコトヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルコトヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直ニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキコトヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官コテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告ノ言渡ヲ受ケタルト否トテ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免ガレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ理由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後訴訟ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルコト又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルコト及ヒ其事由
二 被告人ノ訊問及ヒ陳述

三 證人鑒定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サ、時ハ其事由
四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルト是等ノ事件ニ付キ檢
察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告ハラシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪
席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辨論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添
フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシ

テ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未ク其證

人ヲ呼出サ、ル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求

ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アルヘシ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛リ前檢察官其他訴訟關係

人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セシテ檢證處分ヲ爲スヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可

シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證

人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他

ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第四編 ○違警罪公判

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官

民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證據アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原

告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所

ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ

書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ

者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人

ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ

規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ

送致ス可シ且被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百二十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過

シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無

効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立

第四編 〇違警罪公判

期限ハ對審裁判ニ付テノ言渡ヨリ三日内又欠席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ
言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送
致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出
ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル
後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマデ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶
ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル

證人ヲ呼出スヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取

消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡ヲ得ス

私訴ニ付テノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ
得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出
狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被審

第四編 ○輕罪公判

事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明スルシ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被

告人ニ示シ辯解ヲナサシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲ス可シ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ缺席裁判ヲ爲ス可

シ得可キ被告人其呼出ノ時日ニ出廷セサル時ハ缺席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 缺席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦

之ヲ適用ス

第三百五十六條 缺席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期

滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲ス可シ得

一被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二裁判言渡ヲ本人送達シタル時

三被告人裁判執行ニ刑ノ言渡アリタルヲ知リタル證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リ
タルヨリ三日内ニ故障ヲ爲ス可シ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ

因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲ス可シ得但是等ノ處分ヲ

爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書

ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ被告人勾留ヲ受タル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋

放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送

附スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケタル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ

送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得

檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ始審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤ハ又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ之ヲ爲スコトヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時モ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ欠席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

第四編 ○輕罪公判 ○重罪公判

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リテ其事件ヲ移スノ言渡
 二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
 第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ
 控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ
 始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行
 フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ
 第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ摸樣
 二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地
 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑
 四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略
 第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人
 ヲ記載ス可カラズ
 第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記
 載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヲ裁判所長ニ
 請求スルヲ得
 裁判所長同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別

ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同事ニ辨論ヲ爲サシムルヲ
 ナ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少シトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ
 被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十
 四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリ否ヤヲ問フ可
 シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可
 シ
 被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人ノ數名ノ辨護ヲ爲サシムル
 ヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辨論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辨護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被
 告人自ラ辨護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人
 ナ改選シタル時ハ三日間辨論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辨護人ヲ選任スルニ付キ其
 式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辨論中辨護人ヲ改選シ及ヒ辨論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辨護人ナクシテ辨論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條 ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルコトアリト雖モ辨論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第三百八十二條 辨護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルコトヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

辨護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非ザレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キコトヲ

陳述ス可シ但被告人呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判官辨論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫審陪席判事ト爲スコトヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即事ニ訊問及ヒ辨論ニ取掛ル可シ裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辨ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辨論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證據ヲ差出スニ從ヒ其證據ニ付キ辨解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出ヌコトヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ
第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時

ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヲ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得
得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辨論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辨論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辨論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辨護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辨論スルヲ得

第四百九十九條 前條ノ辨論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辨護人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲スヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辨論ヲ延期スルヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ヲシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辨論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ

檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ

次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百四條 陪席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セ

シメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第四編 ○重罪公判

民事擔當人ハ答辨スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ
第四百六條 欠席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 欠席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ欠席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ
其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 欠席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄地外又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十 擧律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタリシニ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヲ得ス

第五編 ○上告

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四
百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得
大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判
ニ就テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ
除ク外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲メタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス
可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ
第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辨書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出
ス可シ

書記ハ其答辨書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ
第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書ハ二通ヲ作り二通ヲ大審院ニ差出ス

一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所
ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコトヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スコトヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲
シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所
屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事中心テ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由
シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辨明書ヲ差出スコトヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ二日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス
可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ裁判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時

ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル
場合ハ此限リニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判言渡

ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ裁判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、

ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ裁判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラ

サル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ
其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ
他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判

所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコトヲ
得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタ

ル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿
ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀

訴スルコトヲ得
一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時
二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時
三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス
可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辨書

ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコト得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコト得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二同一ノ事項ニ付共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル正公ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコト得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察官

三大審院檢察官但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラヌ何時ニテモ之ヲ爲スコト得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢察官ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察官自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢察官ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ關キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察官ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス付キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第五編 〇再審ノ訴 〇裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヨ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヲ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ得

大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ得
第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ
第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ得
第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢察長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聞クヲナク速ニ前條ノ訟ヲ判決

ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス可シ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辨論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲ス可シ得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ得
第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ
第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條 死刑ノ旨渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第五編 ○公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ証 ○第六編 裁判執行

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指

揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書テ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官

吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ欠席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記

既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シ

タル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二罪名刑名

三再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異義ノ

申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テハ違ノ申立アリタル時

ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁

判官ニ檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見

ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規

則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者

ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第六編

○裁判執行

○復權

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 裁判官渡書ノ謄本

二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四 倍償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ
前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條

復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判官渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官意見書ヲ添フ可シ
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

第六編

○復權

○特赦

治罪法追告

○太政官第四拾四號御布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際己ムテ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付キテハ總テ上訴ヲ許サズ此旨布告候事

○同第四拾五號御布告

公訴私訴ニ係ル控訴上告及ヒ證人呼出費用等ノ儀當分左ノ通相定候條此旨布告候事
刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ若シ豫納スルコト能ハサル時ハ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ許サズ

豫審者ハ公判ニ付證人ヲ呼出サント請フ者アル時ハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ

若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキ時ハ治罪法第七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置クヘシ

○同第四拾六號御布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト恩料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルヲ得

治罪法第三百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又タ旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラヌ

治罪法第六十八條第七十三條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦カラヌ

○同第四拾七號御布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルコトハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ク正當ノ事由ナンシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○治罪法追告

〇同第四拾八號御布告

刑法治罪法中違警罪裁判所ノ儀ハ當分ニ府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

〇同第五十四號御布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ此旨布告候事

〇同第五十五號御布告

但シ本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續便宜可取計且其手續上ニ付キテハ上訴ヲ許サス
治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

〇同第五十六號御布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所(即チ違警罪裁判所)始審裁判所(即チ輕罪裁判所)ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

〇同第五十七號御布告

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

〇同第五十九號御布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

〇同第八十二號御達

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要

ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得

但時機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

〇同第八十六號御達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルタメ其院長所長ノ照會ニ應ジ一名又ハ數名巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入り看護セシムヘシ此旨相達候事

明治十六年十二月廿四日出版御届

同 十七年一月

出版

定價金二拾錢

編輯人

東京府士族

吉田春盛

京橋區越前堀
壹丁目四番地

東京府平民

須原鐵二

日本橋區西河
岸町十貳番地

北畠茂兵衛

稻田佐兵衛

丸屋善七

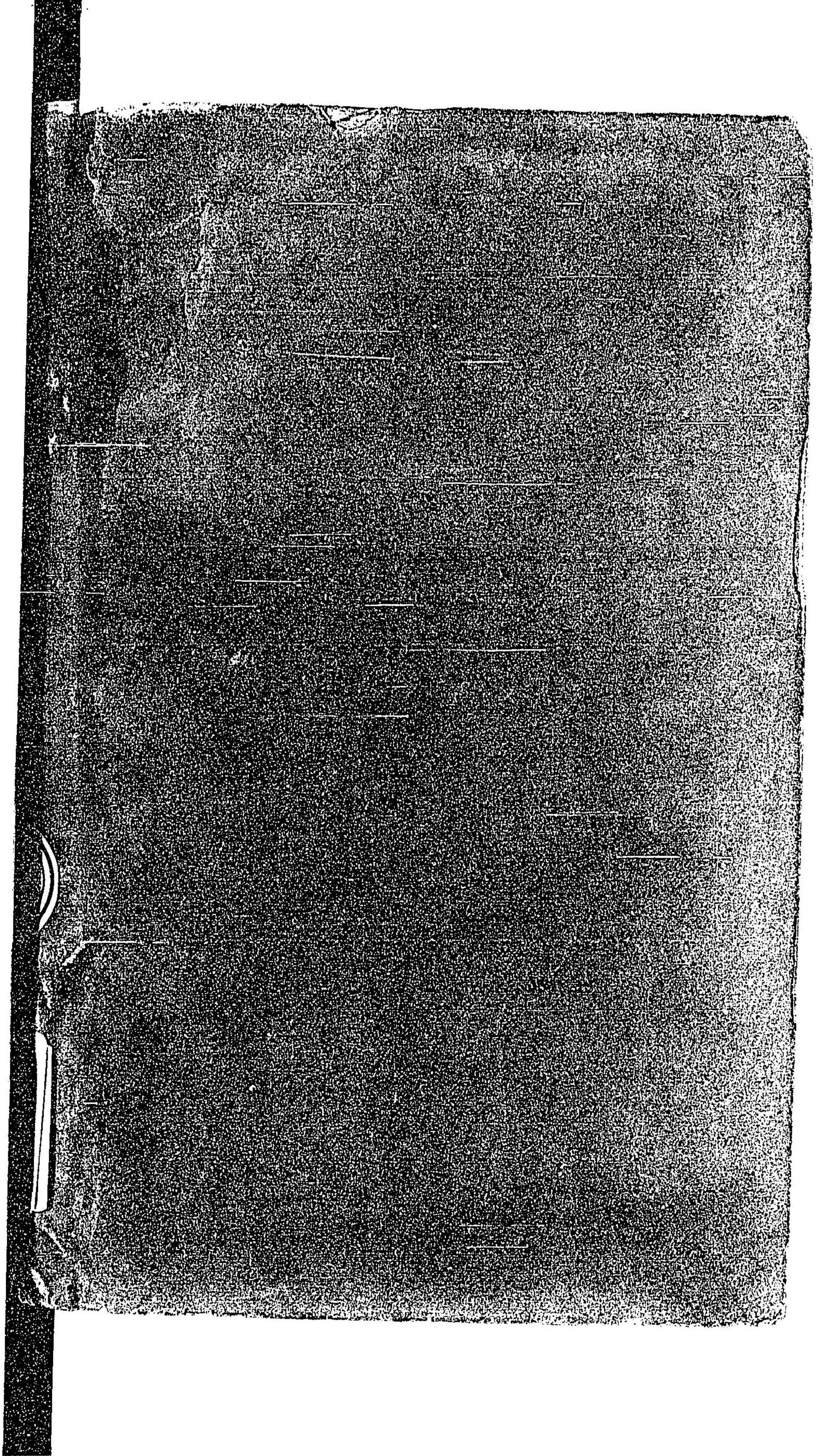
博文本社

出版人

賣

弘

所



98
8
1356

035829-000-5

CZ-711-0132

刑法治罪法

吉田 春盛/編

M17

BBP-0415



C
7
01